天女の消えた楽園

糸雨　冷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
天女の消えた楽園

【Ｎコード】
Ｎ１２７３ＢＡ

【作者名】
糸雨　冷

【あらすじ】
とりあえず保留・・・

＊サイト掲載済

1　出会いはとても綺麗で嫌いな色

ゆっくりと体を起こせば、枕もとに散らばっていた長い緋色の髪が背に流れる。

緩慢な動作で窓の方を向くと、誰か店の者が開けておいてくれたのか、ただただ閉め忘れたのか、薄く開いた障子張りの部屋の窓から日が差し込んでいる。
外はすでに日が昇りきっており、時刻としていうなれば真昼とでも言うべきか。

「あぁ…そろそろ仕事の時間か…。」

ゆっくりと身を起こせば腰ほどまでもある長い緋色の髪がさらりと揺れる。
寝間着代わりの単衣の帯を解き、彼は普段着に着替えた。

「樋摘(ひづみ)様、表の方は滞りなく進んでおられるでしょうか。」

凛とした声が響き、名を呼ばれた樋摘は振り返る。
そこには予想した通り、腰ほどまである長い緋色の髪を、頭上で一つに結った青年の姿。
…彼の年齢を考えれば、少年の方が正しいのかもしれないが。

「おはようございます、白妙君(しろたえぎみ)。別に何も問題ありませんよ。」

柔らかな声で樋摘がそう言うと、白妙君、と呼ばれた少年は小さく頭を下げる。
背に流れる緋色の髪がさらりと揺れる。

「では私は、これにて下がらせていただきます。
何か用がございましたら、申しつけくださいませ。」

そう言って部屋の襖を閉めようとする白妙を、慌てて樋摘は呼び止める。

「あのっ…白妙君、今宵は女衒(ぜげん)殿がいらっしゃるのよね？」

「えぇ、いらっしゃいます。
ですが樋摘様、女衒と言うのは仕事の名にございますから、
それに殿をつけるのはいささかおかしゅうございます。」

白妙のその言葉に、樋摘は意味がわからなかったのか、きょとんと首をかしげて黙ってしまう。

「ねぇみーちゃん、別に様なんてつけてくれなくってもいいのよ？」

「アンタ、俺の話聞いてないでしょう。
それとみーちゃんって呼ばないでください。」

端正な顔を引きつらせて言った白妙の言葉に、樋摘は少女のように小さく笑う。

「聞いているわよ。
それにみーちゃんはさっきみたいな堅苦しい話し方や私って一人称より、
普段通りに俺って言ったり少し砕けた今の方がよっぽどいいわよ。」

やはり話を聞いてない樋摘の相手に嫌気がさしたのか、白妙はため息をついて、小さく頭を下げて、部屋の襖を閉めた。

ここは天姫殿。

天姫、と呼ばれる美しき当主のもと、表は料亭、裏は遊女屋をよ夜な夜な営み、数多(あまた)の女たちが働く魔の巣窟。

そんな天姫殿で体の弱い十七(あまき)代目天姫・今宵野(こよいのさほ)桜歩の代わりに天姫殿の多くを取り仕切るのが件の少年・白妙の役目である。

長い緋色の髪、大きな、どこか猫を思わせるややつり上がった濃紺の色を持つ瞳は、静かながらも意志の強さを感じさせる。

まっすぐ背を伸ばして歩いていた彼は、天姫殿の最上階、一番奥にある一室の前で立ち止まる。

襖の前に座り、静かに襖を開けて、頭を下げる。

「失礼いたします、天姫様。今宵の御調子いかがでしょうか。」

「天姫様、じゃなくて昔のように呼んでくれたら返事しようかな。」

にっこり笑ってそんなことを言う桜歩に、白妙も笑みを浮かべる。

無論、絶対零度の微笑みと言うやつだが。

「あぁそうですか、今宵の体調はばっちりと言うことですね。

じゃあ働いてください、馬車ウマのごとく。」

にっこり保たれた美麗な微笑みが恐ろしい。

なんだか近年、白妙がどんどん強くなって、桜歩は口ですら勝つことができなくなった。

桜歩の方が6歳も年上なのに。

「申し訳ありませんが、今宵も天姫代行よろしくお願いしますぅ―」

「承知いたしました。最初からそう言えばいいんですよ。」

ぶつぶつと小さな声で文句を言っている桜歩を放置して、白妙が部屋から出ようとすると、慌てて桜歩は彼を引きとめる。

「ちょっと待って、今日って初殿が来るんだよね？」

「えぇ、何やら綺麗どころが入ったとかでおいでになるそうですよ。」

桜歩の問いに、白妙は嫌そうな表情を隠そうともしないまま答える。白妙は初――――天姫殿によく少女を売りに来る女衒である彼が嫌いらしい。

煌びやかな天姫殿。

その中に着流しの男が一人、にやにやと笑って白妙の後ろをついて歩く。

「人のストーカーしてないでとっとと用事すませて帰ってもらえませんか、初殿。」

つんとした口調で言い放たれた白妙の言葉にさえも初と呼ばれた男

は動じない。

「ひでぇなぁ白妙ちゃん。オレは君のために上玉捕まえてきたってのによ。」

「あぁそうですか。
じゃあとっととその娘の買い取りの値をお決めいたしましょうか。
貴方にとっととお帰りいただくために。」

そう言って白妙は今宵、天姫殿に売られる少女がいると言う部屋の襖をスパンと開ける。
その少女――――初によると雪葉（ゆきは）という名らしい――――が初と来たとき、白妙は別の仕事をしていた。

だから見世の者に、いつも女衒である初から娘を買い取る部屋に通しておいて貰ったはずなのに、いつのまにか初は白妙の傍にいた。
それもいつものことなので白妙は文句を言いつつも諦めている。

「初、おかえり。」

無表情ながらも端正な顔立ちの少女が、部屋に入ってきた白妙と初にそう言った。

鮮やかな桜色の髪の細身の美少女。

何も考えずに見れば、その子はこの天姫殿でもかなりの売れっ子となるだろう。
だけど白妙の思考回路はそこに行くつく前――――――彼女を一目入れた瞬間に硬直した。

2　何よりも白くない、白い存在

天姫殿の廊下で見かける。よく、見かける。
炎のような、緋の色。
深く、暗い、濃紺の瞳をしていながら、なんであの人はあんなに鮮やかな色を持つのだろう。
そのくせ彼は、白妙、という色のない名を名乗った。

「はーい、雪葉ちゃん。
外に見たいものがあるのはわかったから、今はちゃんと琴の練習してねー」

やる気のない調子で桜歩――――天姫はパンパンと手を叩く。
白妙と同じ、濃紺の瞳。
しかし桜歩の髪は薄紫で、白妙の髪のように鮮やかな色合いではない。
病弱なことも相成って、今にも桜歩はゆらり消えてしまいそうだ。

「白妙は…なんであんなに白いんだろう。」

風通しを良くするため、開け放たれた桜歩の部屋の襖。
もう夏も終わり、心地の良い秋の風が、部屋の中へと入ってくる。
そのさらに向こう側、庭を挟んだ向こうの廊下にくるくると動き回る、緋色の髪を持つ男の姿が見える。

白く、妙なる存在。
妙なるとは何とも言えないほどの美しさを言う。
その白妙という名を、体現したかのような、鮮やかな髪色ながら、
空気のように目立たない男。
それなのになんで、私は彼を、いつも見つけてしまう？

「白妙が…白い、ねぇ…。
まぁ肌は白いけど、こんな仕事していると日中日に当たることもあ
んまりないし、それは仕方ないんじゃ…」

「そうじゃない。」

そうじゃ…ない。

「なんで白妙は、透明というか、白いというか、なんていうか…。
まるで…空気のようなんだ。
それなのに、なんで私は彼を見つけてしまうんだろう・・・」

うちの見世が買い取った新しい娘…雪葉はえらく白妙をお気に召してしまったらしい。
それにしても彼女の言う『白妙は白い』というのが僕にはまったくわからない。
髪は緋色だし、瞳は濃紺だし、腹の中は真黒だし…。

「ねぇなんで雪葉は白妙が白いと思うの？白妙とかとっても腹黒い・・・ナニモイッテナイデス。」

壁に耳あり、障子に目あり！

もともとうちの店は実働にあたっている最高責任者が白妙なので、白妙に情報が回りやすい。
……天姫は僕のはずなんですけどねー。
まぁあいつが『白妙』なんだから仕方ないんだけど。

「白妙を、白いと思う理由は私にもわからない…。
それでもなぜか、白妙は白いと思う…。
桜歩はなんで白妙が白いかわかる？」

いや、僕が最初に聞いたんですけど…。

「僕は白妙が白いと思わないのでわかりません！
それよりも、桜歩じゃなくて天姫って呼んでね。
まぁ、そんなに気になるなら、三十分休憩をあげるから、本人に聞いてきたらいいよ。」

僕の言葉に雪葉は白妙にくぎづけだった視線をパッと僕に向ける。

「ありがと、天姫っ！私、聞いてくるっ！」

あわてた様子で雪葉は出て行ったが、僕にはどうしても白妙が質問に答えるとは思えなかった。
だって白妙は仕事中に無駄口叩くようなこと嫌いだからね。
完全に僕の視界から、雪葉が消えて、僕の視線の先に見える白妙のいるあたりに雪葉が現れてから気づいた。

「もしかして……白妙のとこ行けって言ったの、まずかっ…た…？」

本人が言わないから忘れてたけど、白妙は、桜やその色をひどく嫌っているんだ。

桜歩兄が生まれた日に植えられたという、天姫殿の桜の木、
その下に泣いている子供がいたのは、いつのことだっただろうか…？

「白妙っ！」

騒々しい声に自分を示す名を呼ばれ、俺は眉間に皺を寄せて振り返る。
長く癖のない髪を揺らし、近づいてくる少女。
桜の、色。

「っ！」

思わず俺は息をのむ。あの色に関わる、厭な記憶がよみがえる。
―あぁ、泣いていた子供は・・・誰。

「白妙に聞きたいことがあるんだっ」

走って来たのか息を切らせながら雪葉はそういう。
それよりも今の時間帯、この子は天姫指導のもと、琴の練習に励んでいるんじゃ…？
まぁとりあえず、話を聞こうか。

「何かありましたか？」

「えっと、あのなっ白妙はなんで白いんだ？」

不思議で謎めいたその問いに、俺は思い切り首をかしげる。
まったくもって、意味がわからない。

「私は自分が白いと思ったことも、白いと言われたこともないので、
その問いの意味がさっぱりわかりません。
わかったなら自分のすべきことに戻ってください。
私にも仕事がありますので、これにて。」

そう言って、俺は彼女に背を向けて歩き出す。
……いや、歩き出そうとした、が正しい。
だって俺は、彼女に腕を掴まれ、足を止めたのだから。

「桜歩も白妙が白いと思わないって言ってたんだ。むしろ腹黒だって…。」

雪葉のその言葉に俺は心の中で舌打ちする。
あの人、人を腹黒呼ばわりしたんですか、そうですか。
あとできつく言っとかないと。
そんな俺の内心には気づかず、雪葉は言葉を続ける。

「でも私は白妙のこと、白いと思うんだ！
でもやっぱり、誰に聞いてもみんな白妙は白くないという。
それじゃあなんで、白妙は白がつく名前をしているんだ？」

きょとん、そんな形容詞が似合う風に、つまりは無邪気な子供のように、彼女は小首を傾げて訊ねてくる。

なんでその理由を、彼女に誰も教えなかったんだろう。

「白妙が、私の名前じゃないからですよ。」

「……え？」

俺の言葉に、彼女は目を丸くする。大嫌いな桜の色が、俺を見上げる。

「『白妙』、というのは天姫殿における天姫の補佐を務める者を指す名です。
白く妙なる…白く儚い、まるで空気のようにそっと天姫に寄り添い、天姫殿がつつがなく運営できるように力を尽くす存在、それが白妙です。
よって、『白妙』は役職の名であって、私の名前ではありません。」

そう言って、俺の腕を掴んでいた彼女の手をやんわりと説き、俺は今度こそ、彼女に背を向けて歩き出した。

「じゃあ白妙の名を教えてほしい！貴方の、本当の名を！」

彼女の言葉に、俺はゆっくりと振り返る。
大嫌いな、桜色の髪と瞳をした雪葉は、まっすぐ射るように俺を見る。

それでも俺は、やっぱりあの色が嫌いだから。

「教える必要はありません。
貴女にとって、私は白妙以外である必要がないからです。
わかったなら天姫の元に戻り、琴の練習を続けてください。
……あぁ、そうだ。貴女の源氏名が決まりました。」

俺は形だけの笑顔を作り、ゆっくりと彼女に近づいた。

「酔夢。
しっかりと天姫の指導を受け、立派な遊女となることが、ここに売られてきた貴女の使命です。
私の名前だなんて、必要ない。」

3　差しのべられたその手が

降り注ぐ桜色の花びらが、邪魔で仕方がなかった。
無音と言えるその昼の遊女屋はただただ静かで、人は確かにいるのに誰もいないようで、俺だけが取り残されたというその事実を、俺に強く認識させた。

「どうかしたの？」

頭上から聞こえた声。
俺は慌てて涙を拭き、顔をあげる。
逆光になって顔は見えない。
薄紫の髪が、ゆらり、風にゆれる。
桜色の華を咲かせるその木の枝に座って、彼は俺を見下ろしていた。

「父さんも、母さんも、いなくなった。」

薄紫の髪の彼は、ただ静かに俺の話を聞いていた。

親が目の前で殺されたこと。
その犯人は俺だけ殺さなかったこと。
犯人が逃げる時、俺の視線とそいつの視線が絡んだこと。
そいつの目が何も感じてなく、無表情だったこと。
よすぎたその手際、異様に若かったその見た目から、そいつはその道にどっぷりつかった家の人間…忍者か何かだろうということ。

復讐を望んでいた俺に、それをさせないため知り合いの人によって伯父が天姫を務めていたここ、天姫殿へと預けられたこと。

「それで君は、なんで復讐をしようと思ったの？」

トン、と。
軽い音をたてて、長い薄紫の髪をなびかせ彼は俺の前に舞い降りる。
大きな濃紺の瞳が俺を見る。

「一人に、なったから。」

鋭い視線で彼をにらみ、そう言った俺とは対照的に、彼はにっこりとほほ笑み、手を差し出した。

「じゃあ、僕が一緒にいてあげる。
僕が君の家族になってあげる。
だから君は、いつか僕のために白妙になって。」

それが俺にとっての、世界の始まりだった。

いつも通りの時間帯に起きだして、俺は身支度を整え今日も天姫代行としての仕事と、白妙としての仕事の両方をこなす。
樋摘姉の言うところによると俺は俗に言う有能な補佐らしく、手際よく自分の仕事と共に主の仕事も片付けることができる。
それに近頃は、天姫様にその日仕事ができるかを聞きにいかなくてすむぶん、さっさと仕事に取り掛かれるからある意味で楽だ。

天姫様は秋が深まるにつれ体調がどんどん悪化し、ここ数日は布団をでることもままならない状況だった。

桜歩兄は、初めて俺とあったあの時にはすでに、体が弱く、寝込みがちな人だった。
先代天姫……つまりは俺の伯父の一人息子でありながら、彼は幼いころから、二十歳まで生きられないだろうと、医者に宣告されていた。

だけども彼は、彼が十八だった年に彼よりも五つ若い遊女見習いだった少女を嫁に娶り、二児の父となり、もう少しすれば、二十三歳の誕生日を迎える。

十二月一日に桜歩兄は二十三歳になる。
だけど桜歩兄の主治医の話によると、彼は誕生日を迎えられても、年を越えることができない可能性が高いらしい。

見世を開ける準備が済んだあと、開店までのそのわずかな時間、俺は彼の話し相手になるべく、彼の部屋にやってくる。
もう十一月も終わり、彼の誕生日当日となった今日、だいぶ風も冷たくなってきたというのに、彼はこうやって俺と話している間、窓を閉めることを許そうとしない。
自分が生まれ育った、天姫殿の景色を覚えておきたいんだそうだ。

「みーちゃん、みーちゃん。」

「貴方まで樋摘様のように呼ばないでください。」

あきれた調子で俺が言えば、彼はもうすぐ二十三になる年齢にはそぐわない幼い顔立ちで頬をぷぅと膨らませる。

「いつからみーちゃんはそんな子になったのかな。」

やめてくれと言ったとこなのに、変わらず『みーちゃん』と呼ぶ彼に、俺は大きなため息をつく。
人の話を聞かないところなど、この夫婦はとてもそっくりだ。

「ねぇ、みぃ。雪……降ると思う？」

小さく彼が首をかしげると、肩にかかっていた薄紫の髪がさらりと零れおちる。
先代と同じ、薄紫の髪と濃紺の瞳。
壊れてしまいそうなほど儚く、ガラス細工のように美しく繊細な容貌。

「そんなこと、俺にはわからないよ。」

彼が、俺を昔のように“みぃ”と呼ぶから。
思わず俺も自分のことを“俺”と言ってしまったのに気付き、パッと口元を押さえる。
そんな俺を見て、彼は小さく笑いをこぼす。

優しくて、消え入りそうなほどに美しい頬笑み。
まるで何もかもを悟ったようなその微笑みに、俺はぞっとしたものを感じた。

行かないで、消えないで、置いていかないで。
俺の、たった一人の家族。
俺にとっての…最後の世界。

「別に“俺”って言ってもいいと思うけど？」

「いけませんよ。ただでさえ若年ってことでなめられるのに、そんな一人称使うわけにいきません。」

ツンとそう言えば、また彼はふっと笑う。
初めて会った時から、彼はずっと綺麗だ。
俺がこの世で一番嫌いな、あの儚い桜の華のように。

「若年に見られるとか、子供に見られるとか、君はよく言うけど、
みぃはまだ十六じゃない。
そんなに肩に力入れて、眉間にしっかりしわ寄せてるから、二十歳
くらいに見えるとか、
老けてるとか言われるんだよ。」

そんな失礼なことを言う彼に、俺はまたため息をついて立ち上がる。

そろそろ時間だから見世を開けなければならない。
立ち上がり彼から背を向けて、そこで初めて気づく。
はらはらと、舞い落ちる白い結晶。六花と呼ばれる、冬の風物詩。

「ゆ・・・き？」

驚いた俺の声に、彼はまた笑う。
望みが、叶ったと。
慌てて我に戻り、俺は部屋から出るべく歩を進める。
彼に背を向けていたので、どんな顔をしてそう言ったのか、俺は知らない。

それを後悔することも、
俺は、知らない……。

「雅灯。」

久方ぶりに呼ばれた、俺の本名。
そこで俺は足を止めたのに、なんで振り返らなかったのだろう。

「雅灯のこと、大好きだよ。
本当の兄弟じゃなくても、雅灯が僕の大切な弟であることに変わりはないから。
仕事、頑張ってね。」

その彼の言葉に、俺は何だか怖くなってそのまま部屋を出てしまった。

それを後悔するのは、その日の夜更けのこと。

4　世界の終焉に踊る

彼が好きだった純白が、はらはらと空から舞い落ちる。
まるでその様は天使でも舞い落ちそうで、とても神秘的。

「え…今、なんて…。」

天姫の身の回りの世話をしているものから、もう一度同じことが伝えられる。
それを聞いた途端、情けないことに俺はその場に座り込み、動けなくなってしまった。

十一年前の、俺の両親が亡くなったあの日。
家族を失った俺の新しい家族。
桜歩兄が、亡くなった。

俺はまた、置いて行かれてしまった。

天姫殿の大きな桜の木。
裏の遊女屋、表の料亭。
その二つを分ける、大きな、大きな、桜の木。
彼は、“桜”という字をその名に持つだけあって、その花によく似ていたように今になって思う。

桜とは、春の象徴であると同時に儚さの象徴でもある華。

知ってた、知ってた。
いつか、こんな日が来てしまうこと。
彼は俺よりも年上だったし、二十歳までしか生きられないと言われておきながら、二十三の歳を迎えた。

天女は、楽園へと帰った。
俺を、置いて。

「姉さん、姉さん。」

私は自分の前を歩く麗しの美女を呼ぶ。
もちろん彼女は、私の本当の姉ではない。
遊女見習い…禿の私に、遊女となるためのいろはを教えてくれる先輩遊女だ。

「どしたんだい、酔夢。」

白妙がつけてくれた、私の源氏名。
あれから何度か白妙の本名を知ろうといろんな人に聞いてみたり、本人に聞きに行ったりしたけど結局誰も教えてくれなかった。

そんなうちに桜歩……天姫がなくなり、天姫殿は騒がしくなり、白妙の姿を目にすることがなくなった。

「なにやらいろいろと仕切っているあのおじさんは誰ですか？」

私がそう聞くと姉さんは口元に人差し指を当てて、静かにするよう言う。

「あの方は先代の白妙様や。
去年代替わりしたときに隠居しはったんやけど、ほら…天姫様が亡くなられたやろ？
それで幼い今の白妙様はえらい弱られて、今は奥に引っ込んどるやない。」

姉さんにそう言われて、初めてここ数日白妙を見かけなかった理由を知る。
と、言うか…幼い？

「あの姉さん、白妙…様って、天姫様と御歳が変わらないのでは？
でしたら幼いはおかしい…。」

「何いうてんの、あんた。
天姫様は二十三歳やったやろに。
白妙様はあんたとさほど変わらんで。
あの方は十六歳のはずやけんなぁ。」

じゅうろく、さい。
私の年が十四歳で、白妙の年が十六歳？
ということは二つしか変わらない…？

「まぁ白妙様と天姫様はとても仲のいい従兄弟やさかい、
白妙様が自室にお籠り遊ばせてまうんも無理ないかもしれへんね。」

こそこそ、忍び足。

あのあと姉さんから白妙が籠もっているという場所を聞いた私は、仕事を抜け出してその場所へとやってきた。

いけないことだとはわかってる。
だけど茫然自失となっているという彼の様子がどうしても気になったんだ。

天姫殿最上階、最奥にあるその部屋で、彼はただ泣いていた。
いつも高い位置で結ばれている緋色の髪は肩から背中へと流れ、まるでその様は幼い子供。

「何をしにきたの」

後ろを振り向くことさえせず、彼は言葉をつむぐ。
ただ静かで、痛々しい彼の様子に、私は何も言うことができない。

「帰って。今は仕事の時間でしょう。帰って。」

彼はちらとも、私を見ようとしない。
ただそれが彼の傷ついた心を現しているようで辛い。

「何で私を見てくれないの」

普段よりもずっと小さく見えるその背中に問いかける。

こっちを向いて、私を見て、私を……呼んで。

「桜の色が、嫌いだった。あの華が咲く季節に俺は独りになったから。だけど……。」

ゆらり…。床ばかり見ていた彼の視線が宙をさ迷う。
まるで何かを思い出すかのように。

「桜歩兄は、名前の通り桜に似ていた。
儚くて美しくて、大きな大きな、あの桜の木に。」

宙をさまよう彼の視線、彼はきっと、桜歩のことを思い出している。

「俺が独りになったあの日、桜歩兄が一緒にいてくれるって言ってくれた。
だから俺は独りじゃなくなったのに…また俺は独りになった。」

そう言って彼はうつむく。
何があったのかはわからないけど、姉さんが桜歩と白妙は従兄弟だと言っていた。
おそらく白妙は、ここに引き取られてきたんだろう。
親を失って。

だから、独り。
そんな白妙と一緒にいてくれたのが桜歩だけだったから、“また独りになった”。

「じゃあ私が、白妙と一緒にいるわ。」

するりと自然に言葉が零れた。
本当は、最初からわかっていたのかもしれない。

私がいつも白妙を見つけてしまう理由。
それはとても単純で、それでいて奥が深い。

「白妙が好きなの。」

私は貴方を、独りにはしない。

5　重ねられたその小さな手が

俺のことを好きだと言ったあの少女は、俺を独りにしないと言った。

「白妙さん！ちょっとこっちにきなさい！」

先代白妙、乙衣様の協力もあって、天姫がいなくなった天姫殿は何とか機能している。
あれから数日、彼女の言葉によって救われた俺はなんとか白妙としての仕事をこなしている。

彼女はと言うと、俺に言った気持ちの答えを求めようとせず、ただ懐く子犬のように、自分の仕事の合間を見つけては俺のところへやってくる。
そして俺も、そんな彼女に甘えて答えを返してない。

「やっぱり…ずるいのかな。」

「誰がずるいの？」

誰に向けたわけでもないそのつぶやきに返事を返され、俺は思わず飛び上がる。
今割れ物持ってたら絶対落として、乙衣様に大目玉くらうとこだった…。

「あら、ごめんなさい、みーちゃん。驚かせちゃったかしら？」

そんな言葉に振り向くと、後方斜め下に樋摘姉の姿。
そう、いくら彼女が童顔で背が小さかろうと、兄のような存在であった桜歩兄の妻である彼女は兄嫁、つまりは義姉さんということになる。

「それで、何がずるいのかしら？」

きゅるん、という謎の効果音が付きそうなくらいに可愛らしく、彼女は首をかしげる。
確かこの人…二児の母じゃ…。

「えっと…あの、その…。」

俺がどう言うか、それとも言わないか悩んでいるうちに、彼女は勝手に話を進めていく。
桜歩兄の前では大人しい女というか、良妻的だったのだが、俺の前での彼女はよくしゃべり、暴走を繰り返し、勝手に話を進めていくことが多い。

「あ、もしかして雪葉ちゃんかしら？
えっと、源氏名は確か酔夢ちゃんよね？

彼女、ここのところ毎日みーちゃんの所にかよってきてるんでしょう？
あらぁそれってつまりは通い妻っ」

「あんたちょっといっぺん黙ってください。」

とんでもないことを言い出した樋摘姉の口を慌てて手でふさぐ。
そんなこと言ってるの聞かれて怒られるのは俺なんですよ。

「白妙さん？こっちに来なさいと言う私の声が聞こえてなかったんですが？」

背後から聞こえた乙衣様の声に俺は思わず飛び上がる。
考えことをしていたからよく覚えてないが、呼ばれたような、呼ばれてないような…。

まぁ呼ばれた気はするが、
樋摘姉の出現に驚いた時にそんなこと頭の中から飛んで行ったというのが正しいか。

「すいません、樋摘様と少し、話をしていたものですから…。」

そこまで言って、今更ながら思い出す。
この二人、天敵と言ってもいいほど仲が良くなかったことを。

「そうですか、白妙さんの仕事を邪魔していらっしゃったのは樋摘様にございましたか。
ご自分の仕事もなさらず、裏の仕事の邪魔をしに来るとは天姫の奥方にあらしゃるだけあって、いい御身分ですねぇ。」

「あら、別に私だって暇なわけじゃないんですよ？
ただ今は表の仕事も終わりが近く少しばかり手も空きましたので、こちらの様子はどうなっているかなぁ、傷心の白妙君が乙衣様にいじめられてないかなぁと思い、見に参っただけですのよ。」

間に俺を挟んでバチバチと火花を散らすこの大人二人が怖いです。
もう何というか…仕方ないのかもしれないがあまり見たくない。

「白妙、あの二人は何してるんだ？」

そんな声に振りかえると斜め下に雪葉の姿。
今頃気づいたが、雪葉の身長は樋摘姉と同じくらいだ。
ということは、桜歩兄より五尺（十五センチ）…たしか彼と俺の身長差が二尺（六センチ）ほどなので、七尺ほども小さいのか。

「何してる…というか、戦っている…かな？」

あの二人はもうずっと前…それも桜歩兄と樋摘姉が結婚した頃から仲が悪い。

まぁその二人の結婚が、樋摘姉と乙衣様の中の悪い原因だけど。

「乙衣と樋摘は仲が悪かったのか…。なんでだ？」

「乙衣様と樋摘様、な。まぁ仲が悪い理由は単純だよ。」

俺はそう言って、あの頃を思い出し小さく笑う。
あの頃の樋摘様は俺より幼く、だけど今とあまり変わりがなかった。

「樋摘様はもともと、遊女見習いの禿だったんだ。
だけどそんな樋摘様に桜歩兄は恋をして、彼女を妻へと娶った。
もちろん、乙衣様の反対を押し切ってな。
『遊女上がりの奥方なんて許しません。』
そう言ってずーっと乙衣様は樋摘様のこと認めなかった。
だからあの二人は仲が悪いんだよ。」

そう言って俺は肩をすくめる。
その話だけだとまるで姑のように乙衣様が樋摘姉をいびっていたようにも思えるが、先ほどの本人たちのやり取りからもわかるように樋摘姉も決して負けてなかった。
そして俺は桜歩兄と二人、そんな樋摘様を影から見て、『女は強いね。』とよく笑ったものだ。

何を考えているのは、雪葉は悩むような動作をしきりに繰り返していて、はっきり言ってその様子は少々挙動不審とも言える。

「まるで、物語のような話だな。」

俺を見上げて小さく笑い、そう言った彼女に俺は目を丸くする。

確かに、言われてみれば物語のようだ。

『みぃ！みぃ！』

高い位置で結んだ緋色の髪が俺の視界の端で揺れる。
振り返るとそこには長い薄紫の髪を揺らして走ってくるいとこ従兄の姿。

『どうしたの、桜歩兄。』

どうやら走って来たらしく、体が弱いことにより極端に体力のない彼は大きく肩で息をしている。
医者には走っちゃいけないって言われてるのに。
そんなことを思い俺は小さくため息をつく。

『あのねっ、ついに乙衣を口説き落としたんだ！』

一瞬脳裏にいやな想像が浮かぶが、すぐにどういうことかわかり俺は納得したようにうなづく。

つまりは乙衣様から樋摘さんを嫁にする許可をもらったということなんだろう。
まぁ桜歩兄のあまりのしつこさについに乙衣様が折れたっていうのが一番正しいんだろうけど。

『おめでとう、よかったね。』

『うんっありがとうっ。』

そう言って笑った桜歩兄の笑顔、一番幸せそうだと感じたんだ。

「…え、白妙？」

過去を振り返っていたとこに名前を呼ばれ、俺ははっと我に返り、名前を呼んだ少女を見下ろす。
彼女はいつもと変わらぬ様子できょとんと俺を見上げている。

「あれ、止めなくていいのか？」

あれ、と言って彼女が指さした先には火花散らして言い争う樋摘姉と乙衣様の姿が。
何の騒ぎかと人だかりができていて、それでも騒ぎの中心にいること、騒ぎになっていることに気付かない大人二人に頭が痛くなりそうだ。

「ありがとう、止めてくる。」

大きなため息をついた俺に、雪葉は大人二人に呆れたかのように苦笑する。

「うん、がんばれ。
私もそろそろ休憩も終わりだから戻るよ。
水揚げが近いから覚えることがいっぱいあって大変なんだ。」

あぁ、そうか。
雪葉は十四なんだ。

去っていく雪葉の背を見ながら今更とも言えることに気付く。
天姫殿の禿が遊女へとなることを“水揚げ”と言う。

それはだいたい十四の年に行われ、彼女はつい二か月ほど前ここにやってきたばかりだが、
そのときすでに十四だった。

つまり彼女が禿だったのは、ここの暮らしに慣れるまで、だ。

俺が雪葉に与えた、“酔夢”と言う名の意味を、俺は今頃になって認識したのだった。

6　背中合わせて、繋いだその手

乙衣さんからその話を持ちかけられた時、俺は自分の耳を疑った。

「え…あの、いったい何言って…。」

乙衣さんは決して冗談でこんなことを言う人じゃない。
それにこれは冗談で言っていいような話ではなかった。

「別にそんなにおかしなことじゃないでしょう。
十八代目天姫となられる桜歩様のご子息、竜里様は幼く、天姫を継げるような御歳じゃない。
確かに白妙だけでも天姫殿は不自由なく機能しています。
だけどいざ何か起こった時に天姫はおりませんでは済まないんです。」

「そりゃ…わかっていますけど…。」

確かにそれは俺にもわかる。
天姫殿は遊女屋だ。
今まで何代も続いてきた天姫殿の中で、十二よりも幼い天姫をたてることは禁じられている。
桜歩兄の嫡男、竜里はまだ二歳。
天姫を継げるようになるまで最低でも十年はいる。

さすがに十年もの間天姫がいないのは、天姫殿として大変まずい。
だからと言って、その矛先が自分に向くだなんて思ってもみなかったんだ。

「わかっているのな文句言わずにとっとと腹をくくってください。幼い竜里様を除いて今宵野の血を持つ男児は貴方だけなんですからよ、雅灯様。」

今宵野　雅灯（みやび）。
それが、俺の本名。

どうやら桜歩の死を乗り越えたらしい白妙だが、近頃何やらまた何かに悩んでる。
私のことを考えてくれているのならうれしいところだが、私への対応は何ら変わりないのでどうやらそうではないらしい。
残念だ。

あと白妙についてわかったことだが、どうやら彼の本名は“み”から始まるらしい。
樋摘が白妙のことを“みーちゃん”と呼んでいたから間違いないだろう。

これからも私は白妙に関する調査を続けていこうと思う。
好きな人のことを知りたい。
それはとても自然なことだと思っていた。
だけど、それに期限があるなんて知らなかったんだ…。

乙衣様にあの話を持ちかけられてから、俺の頭の中を支配していたのはあの話だけだった。
考えても、考えても、断るすべも他の方法もあるわけないのだが、どうも納得いかない。

確かに俺は先代天姫であった桜歩兄の父の弟の息子で、桜歩兄がいなかったら天姫となることが決まっていたが、俺はやっぱり白妙であって、あの話をすんなり受け入れることなんてできやしない。

そう、乙衣様が言ったあの話とは、『次代の天姫となる竜里様が大きくなられるまで代わりに天姫を継いで天姫殿を支えろ』と言うことだったのだ。

そうして俺がちんたら悩んでいたその頃、乙衣様によって雪葉――いや、酔夢の水揚げの日が決められた。

7　君との間は広がるばかり、それでも・・・

あの日、桜歩兄の白妙になると決めたあの日。
女の墓場と言われるこの場所に骨を埋めようと、そう…決めたんだ。

次代の天姫である桜歩兄の嫡男、竜里はいまだ二歳。
遊女屋である天姫殿を継ぐための最低年齢は十二歳とされている。
あと十年、そんなにも長い間、天姫殿は当主不在のままでいるわけ

にはいかない。
竜里が跡目を継げるようになるまでの十年間、竜里の代わりの、仮の天姫を立てねばならない。
そしてその白羽の矢は、桜歩兄の従妹であった俺へと向けられたのだった。

ゆったりと、鳴りやむことなく鈴の音が響いている。
はっきり聞こえる音の大きさでありながら、決して煩いということもない、心地よい涼やかな音色。

今宵は、仮の天姫、継承の儀。

裾を引きずる形に着つけられた女物の着物に身を包み、
いつもはそっけなく一つに結われているだけの緋色の髪は煌びやかな簪を用いて、
華やかに結いあげられている。

彼の容姿は大変美しく、身につけているものも申し分なく美しいのだが…。

「なんと言うか…すごい恰好だな、白妙。」

私の言葉に、彼は遠い眼をする。決して不格好というわけではないが…なんというか、派手である。それもそのはず、天姫継承の儀に代々使われてきたと言われるその衣装は、
当たり前のように“天姫”となるものに似合うように作られている。

代々天姫は、薄紫の髪と濃紺の瞳を持つ今宵野家の嫡男に受け継がれるもので。

しかし今宵、仮の天姫となる彼…白妙の役職についこの間まで就いていたこの少年は、
今宵野家の血縁でありながらもやはり直系ではないからか、
色素の薄い薄紫の髪とは似ても似つかない鮮やかな緋色の髪をしている。

そのようであるからには彼はもともと“天姫”としては格段に鮮やかな色合いであるからに、
その華やかな衣装が派手に映ってしまうのだ。

ゆるく手を振りながら、彼は私に背を向ける。
継承の儀へと向かう彼の姿が私の視界から消えたとき、私ははたと気づいた。

私は彼を、“白妙”と呼ぶことしかできない。
しかしそれは役職の名であって、彼の名ではない。

今から執り行われる…私のような禿が出席することを許されてない継承の儀が終わると、彼は白妙ではなくなってしまう。

天姫に、なる。
それは手の届かない、天女様。

わけがわからないまま、荘厳かつ華やかな継承の儀も終わり、俺は自室へと帰ってきた。
もちろん最初に行うのは、煌びやかで綺麗すぎる、俺には似合わないこの衣装から着替えること。

いつもの男物の着物に着替え終わったころ、部屋の外から控えめに声が掛けられる。

「天姫様、入室よろしゅうございますか。」

天姫様、そう呼ばれることに、きっと俺は慣れることがないだろう。
俺にとっての天姫はやはり桜歩兄でしかなくて、それを継ぐのは竜里でしかないから。

俺の了承とともに部屋に入ってきた乙衣さんは、俺の格好に目をとめ、眉間にしわを寄せる。
確かに仕事時間内は天姫の衣装でいるべきなのかもしれないが、継承の儀当日である今日は人前に出る仕事もないし、今日だけは見逃してくれてもいいと思う。
そんな俺の心の声が届いたのか、乙衣さんは眉間にしわを寄せただけで何も言わなかった。

「本日は継承の儀、お疲れ様にございました。たいそうご立派にあられましたよ。

そして、さっそくで申し訳ないのでございますが、天姫不在の折にて滞っていた書類がございます。
目を通しておいてくださいませ。
それでは私はこれにて。」

そう言って乙衣さんは部屋から出ていく。
彼が置いて行った書類を、上から順に目を通す。

1枚目は、とある遊女の身請けの話。
二枚目は女衒がまた二人ほど娘を売りに来るという知らせ。

そして三枚目は…雪葉の水揚げの話。

8　手を放すことは簡単で、でもそれを選ぶのは貴方

禿が、遊女になるのは当たり前のこと。
だって禿たちは、そのために金銭と引き換えに天姫殿へとやってきたのだから…。

水揚げの日時を決めて、それを乙衣さんに伝える。
もちろんそれを、本人である彼女にも伝えないといけないのに…なぜか俺はそれをしたくなくて、その役目を乙衣さんに任せてしまっ

た。

何で俺は、それをしたくなかったんだろう。
仕事だと割り切れば今まで何だってできたのに。
考えても、考えても…わからない。
と、言うか一つだけ思い当ることがあるのに、俺はそれを認めたくない。

だって俺は、あの嫌いな色を持つ彼女のことが、嫌いだったはずだ。
鮮やかで馨しい、春を彩る華の色。

確かに桜歩兄が亡くなってから、俺は彼女のことが“嫌い”ではなくなったとは思う。
だけど、それだけだ。
“好き”とか言われたりもしたけど、返事だってしてないし、その返事は“否”しかありえない。

俺は白妙であって—今は天姫だけど—彼女は禿でしかないのだから。
ふと感じた胸の痛みに、俺は首をかしげる。風邪でも…ひいたかな？

「…ちゃん、みーちゃん？」

名前を呼ばれ、視線を向けると目の前に樋摘姉の姿。
考え込みすぎて、気付かなかった。
…というよりも、何で俺はこんなことを真剣に考え込んでいるんだろう。

「ごめんなさい、樋摘姉。えっと…何か用？」

「別に用があるってわけじゃないんだけどね、見世の子が“天姫様がひどくぼぅっとしていらっしゃって、話しかけても反応がないから樋摘様どうにかしてくださいませんか。”って言いに来るものだから。」

樋摘姉のその言葉に俺は思わず頭を抱える。
つまり俺が考え込んでいる間に本当に用事があった者が話しかけたが気づかず、終わりのない思考を巡らせていたというわけか…。

「それで、みーちゃんは何を考えていたのかしら？
仕事馬鹿…もとい天姫殿馬鹿のみーちゃんが仕事を放置してまで考え込んでしまったこと、私、気になるなぁ。」

そう言って樋摘姉はにっこり笑う。
仕事馬鹿だの天姫殿馬鹿だの、突っ込みたい点はいくつもあるが、突っ込んでも話すまで解放してもらえないのは目に見えている。
桜歩兄の前では大人しい女であった樋摘姉だが、彼女は結構したたかでなおかつ強い。
案の定俺は、すべてを彼女に話すしか道はなかった。

根掘り葉掘り俺から聞き出した樋摘姉は、その深紅の瞳に呆れた色を映し出して俺を見る。
なんとなく、視線が痛い…。

「みーちゃんって、変に鈍いわよね。」

「はい？」

鈍いはともかく変だなんて、好きなカタカナ並べて娘に“メリアム”とつける貴女に言われたくない。

「仕事もよくできて気もきいて、しっかり者で落ち着いた性格の男前…でもどことなく鈍いのよね。
まぁみんなそこがいいのかもしれないけど。」

「あの、樋摘姉？まったくもって何の話かわからない。というか、みんなって何のこと…？」

首をかしげて尋ねた俺の目前に、彼女はか細い指をぴっと向ける。

「ほら！やっぱり気づいてない。
あそこまで騒がれていて、全く気付かないっていうのもある意味才能よね。」

そう言って一人納得したように樋摘姉はうなずく。
一人で納得してないで、ちゃんと説明して欲しい。

「みーちゃん、白妙に“天姫殿の王子”って異名がついてたの知ってた？」

「え？乙衣さんそんな風に呼ばれていたんですか？」

俺の答えに、樋摘姉は大きなため息をつく。
なんだか馬鹿にされた気分…。

「あのおっさんにそんな憧れ目線の異名がつくはずないでしょ。王子よ、王子！みーちゃんのことにきまってるじゃない。」

「えぇっ！」

“天姫殿の王子”って…何その、大変恥ずかし異名…そして本人であるはずの俺が全く知らないのは何で…？
それに俺が白妙をやっていたのなんて、一年と少しというとても短い期間で…。

「まぁ遊女屋なんて女ばかりだし、若くて未婚、なおかつ男前のみーちゃんがモテるのも必然だとは思うけど…当の本人は噂なんて全く知らないし、恋愛感情には鈍いし、頭は固くって仕事第一だし……。」

くどくどとお説教とも悪口とも取れるようなことを続けていた樋摘姉が、キッと俺の方を見る。

「でもね、みーちゃん。
あなたはもう従業員（しろたえ）じゃないのよ？
当主（あまき）なんだから、自分の気持ちに素直になって、少しぐらい無茶したって許されるのよ。
みーちゃん、雪葉ちゃんのこと好きなんでしょう？」

水揚げ、それは遊女になるべく売られてきた私にとって、近いうちにやってくるものだった。
禿…客は取らない見習いと言うべき立場である者が、初めて客を取る日、それが水揚げである。

もちろん遊女として春を売るのだから、私にとってもほかの禿たちにとってもそれは嬉しいものではない。

しかしそれ以上に、この知らせを受け取ったときに私が感じた絶望の大きさが重かったのは、その日を決めたのが私の愛する男であるだろうからだ。

ついこの間まで、“白妙”と呼ばれていた鮮やかな緋色の髪の少年。
初めの頃の彼はひどく事務的で、燃える炎の色を持ちながら、冷たい氷のような人に感じた。
“白妙”の名にふさわしい、清廉とした…空気のような印象の人。
“白妙”が本当の名ではないといい、名を聞いたら冷たく突き放された。

桜歩が死んで、彼はとても打ちのめされていた。
泣いている彼は小さな子供のようで、より愛しさが込み上げてきた。
独りになったと泣く彼に、私が一緒にいると誓った。
好きだと、告げた。

それから彼は、私の告白に戸惑いを見せながらも、次第に打ち解けてくれた。
最初に、堅苦しかった口調が柔らかいものになった。
ふとした時に、自分のことを“俺”と言った。
そんな彼の小さな変化が、嬉しくてたまらなかった。
困ったように笑う彼の笑顔が、何よりも愛おしかった。

それだけで、私はとても幸せだった。
ただ彼を視界に入れられる、この場所にいられるならば。愛されることを望んだりもしない。
ただ愛することを許してほしかった。

そして、最後に……。

夕闇に天姫殿が染まる、そんな時間帯。
天姫殿は煌々と明かりを灯し、息づき始める。
そんな頃に回ってきた、一通の手紙。

『桜の木の下で、貴方を待つ。』

手紙の場所に行ってみれば、予想通りの人の姿。
名前は書いてなかったけれど、なんとなく彼女である気がしていた。

「雪葉。」

名前を呼ぶと、長い桜色の髪を揺らして俺を見る。
白い雪に染まった真冬の桜の木を、桜色の彼女の髪と瞳が彩る。

「聞いておきたいと、思って。」

桜の木の下から、それのある中庭に面した廊下に立つ俺の方へ、彼女はゆっくりと歩いてくる。

俺よりもずっと小さな背丈の彼女が、廊下よりも低い位置にある庭から、俺を見上げる。

俺のことを白いと言った、桜の色と雪の名を持つ少女。

「貴方の名前を、教えてほしい。
白妙でも天姫でもない、貴方だけの名前を。」

いつものように淡々とした口調で、彼女は問う。
一度は必要ないと言って、教えなかった俺の名前。

「ミヤビ。」

「みや…び。」

「雅に灯すと書いて、雅灯。」

紅く鮮やかな髪色から付けられたんだろうと言われる、俺の名前。

「みやび…。みや、び。そう…雅灯って言うのね。」

そう言って雪葉は、華のように微笑む。
その笑みを見てると、嬉しさと同時に胸が苦しくなる。

それは“恋の病”と言うのだと、樋摘姉は言った。

「雅灯を、愛してるわ。ずっとずっと愛してる。
私は雅灯を、絶対に一人にしないから…。」

そう言って彼女は、ひどく鮮やかに微笑む。
だけどその微笑みはどこか儚く、今にも消えてしまいそうで…。

俺はとっさに庭へ飛び出し、彼女の腕を引っ張って自分の胸の中に押し込んだ。

それからというもの、思いもよらない出来事の連続だった。
なぜか周囲には俺の雪葉への気持ちも、雪葉の俺への気持ちも知れ渡っていて、
俺の知らない間に乙衣さんのもとにみんなで直談判に言っていたらしい。

そんなみんなの後押しもあって、雪葉の水揚げは中止となって、俺たちは婚約の儀を結んだ。

あの日初めて逢った時から、恋に落ちていたのかもしれないと、俺たちは顔を見合せて笑う。

天女が消えた楽園で、俺は新しい家族を手に入れた。
彼女は俺を、独りにしないと誓い、俺が孤独に怯えることはなくなった。

愛しい彼女が、華のような笑みを浮かべてささやく。

「ねぇ、雅灯。ちょっとだけ思わない？
怒ってくれる乙衣がいて、お節介を焼いてくれる樋摘もいて、心配してくれるみんながいる。

それはとても、家族のようだね・・・。」と。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1273ba/

天女の消えた楽園

2012年1月3日02時46分発行